

り、白きあり、飴色なるあり、大サ定の如く、米粒の如く、明徹滑澤甚愛すべし、此所を過りし日は、天氣殊に朗なりしかば、濱邊に座し、舍利石をひろひ、甚樂り、回國修行の者、杯は、此舍利石をひろひ、大に尊信する事なり、殊に奇なる事は、此濱の磯近く、海中に廣さ五十間程の舍利母石あり、此舍利母石より、常々舍利を産し、其舍利をちて此濱に打あげ、古今絶せず、此故に舍利多しとなり、其舍利母石、水面より餘程深く沈み居て、濱邊よりは見えがたし、此邊の漁父に頼めば、海底に没入して、玄翁にて打破り取あがる事なり、此故に此舍利母石を得る事は頗る難し、されど珍敷物なれば、余も指の頭程の舍利母二ツ三ツを得て歸れり、其全體の色は、薄黒く土の化したる石のごとくにして、其中に米粒のごとき小舍利夥敷孕めり、誠に奇なる石なり、又此舍利濱の先に、今別といふ所あり、二三里も隔れり、此所の濱を瑪瑙濱といふ、此濱に入る前後に自然の石門あり、甚奇境なり、夫より内凡半道餘、瑪瑙石の濱なり、尤常體の石も半まじれり、凡石も瑪瑙も大さ大低拳の程より、鶏卵或は小きは蠶豆のごとし、皆々甚明徹にして、京都にて緒々にするものなり、世に津輕玉といひ、又は寶石ともいふ、人馬往來する濱なれば、足元に玉石みちく、殊に日光にきらめきて、目眩する計なり、其うるはしきに心留りて過行べくも覺えず、程よきはひろひ取りて袖に入る程に、兩の袂やぶる、計なり、されど長き旅路携へ歸りがたく、毎夜三ツ四ツづ、人に與へ、京まで携歸れるは、纒ばかりなり、かくの如き濱、京近くにあらましかば、守る人も嚴敷、門戸杯もありて、みだりに見る事だにも許さまじきを、かゝる人無き邊地なれば、道行人の取に任せ、誰一人禁ずる者なし、めづらしき地なり、

紀伊國
吹上濱

〔紀伊國名所圖會一下〕吹上同濱、今府城の西南をいふ、また砂山とて、ち

此吹上の濱といふは、西南の風烈しきときは、白砂を高く吹上て、一夜のほどに一處に吹あつめて山をなし、又玄ばしが程に吹散してもとの平地となり、こは常に風眞砂をふき上る、これによ